

# 東北大学大学院国際文化研究科

# 同窓会会報 第21号



編集・発行 東北大学大学院国際文化研究科同窓会事務局 発行日:2023年3月24日

〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL (022) 795-7556 FAX (022) 795-7583 E-MAIL (int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp)

## 新・同窓会会長 挨拶

江藤 裕之

(国際文化研究科同窓会会長・言語科学研究講座教授)

国際文化研究科同窓会会員の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

2023 (令和 5) 年 4 月より、高橋大厚先生の後を継いで、国際文化研究科長を務めることになりました江藤裕之と申します。あわせて、国際文化研究科同窓会会長の任も引き継ぎました。不慣れな点も多々あることと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

本年 4 月、国際文化研究科は創設 30 周年を迎えます。 研究科では、昨年より 30 周年記念事業準備・実施委員会 を立ち上げ、記念行事を検討してきました。まずは、同 窓会の名簿を整理し、同窓会会員の皆さまが今、どこで 活躍なさっているかをしっかりと把握し、今後の同窓会 ネットワーク構築の基礎資料にしたいと考えています。

記念行事は、本来であれば 30 周年にあたる本年に行うべきではありますが、今年は、年来の念願であった研究科西棟の改修工事が行われることになり、それにともなう諸手続きや引越しなどで関係者にはとても慌ただしい年になります。そこで、何かとバタバタすることが予想される本年ではなく、新しい研究科棟を同窓会会員の皆さまに紹介できるタイミングで行う方がよいのではないかという準備委員会の意向を踏まえ、来年(2024年)に開催する予定で調整しています。諸般の事情で、また海外の同窓生の皆さまが少しでも多く参加できることを考慮し、オンラインでの開催を考えております。詳細が決まり次第、ウェブサイト上、また DM にてお知らせいたしますので、皆さまのご参会を心よりお待ちしております。

30 年といえば、「世代 (generation)」が交代する時間の単位です。ひとつの時間の区切りであり、次の新しい何かが生まれる (gen-)時です。と同時に、「世界 (world)」が変わることでもあります。英語の world や

ドイツ語の Welt は、wer-(人)と alt (年)からできており、文字通りに言えば「人の年」ということになります。「世界」とは空間的な概念のようですが、これらの語の語源から時間的にとらえられていたことがわかります。たしかに、漢字の「世」も「三十」です。

この 30 年で、私たちをとりまく世界には多くの変化がありました。研究科や大学だけでなく、国内外の情勢も大きく変わりました。とくに、この 3 年は、コロナ禍の影響で私たちの生活スタイル、というか生き方そのものにも大きな変化があったように思えます。この変わりようを「凶」と見なすか、あるいは「吉」とするかは私たちの考え方次第だと思いますが、できるだけ、よい方向、つまり、変革のチャンスだとポジティブにとらえていきたいものだと思っています。

ひとつの大きな変化は、IT/ICT の驚くべき発達により、空間を超えたつながりが可能になったということがあります。先日も、本研究科教員が主催する国際ワークショップが開催され、ゲストスピーカーとして海外からはマレーシアとフランスの研究者が招かれていました。そのワークショップはオンラインとオンサイトのハイブリッド開催でしたが、30年前なら考えられなかったことです。衛星通信を使用するなど高額の経費をかければ不可能ではなかったと思いますが、ここまで簡単に、そして設備にお金をほとんどかける必要もなく数千キロ離れた場所と瞬時につながることは誰が予想しえたでしょうか。まさに、隔世の感ありです。

コロナ禍が始まった 3 年前、授業や会議をオンラインで開催するようにお達しがあり、私たち教員の多くは戸惑いました。試行錯誤の末、何とかオンライン授業やオンライン会議にも慣れてきましたが、そうするとなかなか便利なものだということにも気づきはじめました。今後は、対面(オンサイト)と遠隔(オンライン)のそれぞれの長所を活かした授業や会議、そして研究集会等の運営が可能になり、選択肢の幅が広がったとプラスにとらえています。

もちろん、オンライン集会といったデジタル的な、つまり「点」的な「そこだけ」のイベントよりも、その前後も参加者といろいろな触れ合いのできる「面」的な交流の方がよいとは思います。しかし、後者を実現するための経費や労力を考えると、オンライン的な要素を活用していくことで、より効率のよい手段を選ぶことができます。

こういったデジタル化の世の中から後戻りできない今、むしろ、この利点を上手く使いこなせるようになることが重要だと考えております。そして、同窓会の運営、同窓会会員の皆さまとのつながり、こういったことも積極的にデジタル・ネットワークの中で行ってまいりたいと考えています。と同時に、同じ時間と空間を共有し人間的な触れ合いのできる場を可能な限りもてる行事も実施したいと思います。

先にも書きましたように、まずは同窓会会員の名簿の整理を行い、本同窓会には海外在住の会員も多いことから、主要な国や地域の会員をまとめるハブとなるグループを作り、そのグループをつないでいくことで、本研究科同窓会の交流をより充実させ、双方向の交流がこれまで以上に可能となるネットワークの構築を目指してまいります。会意の皆さまには、これまで以上のご協力をお願いする次第でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

## 第20回、第21回同窓会総会報告

第 20 回総会を 2022 年 3 月 9 日に、第 21 回総会を 2023 年 3 月 8 日に、オンラインで開催しました。講演会 については、コロナウイルス感染症拡大防止のため、行いませんでした。

## 第22回同窓会総会のご案内

第22回同窓会総会は、2024年3月に開催予定です。詳細が決定いたしましたら同窓会ホームページ等でご案内いたします。

国際文化研究科同窓会事務局

## 第28回公開講座

### 「国際文化基礎講座」の報告

第28回公開講座「国際文化基礎講座」(2022年11月26日(土)にオンラインで開催)では『環境と防災 — SDGs の達成に向けて—』と題して、本研究科の2 教員が日頃の研究の一端を披露されました。ここにその講演概要をご紹介します。



## データを活用した

## 災害リスクに強いまちづくり

大窪 和明(国際政治経済論講座准教授)

国連の持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)の達成に向けて世界な取り組みが進んでいます。「誰一人取り残さない(leave no one behind)」を基本的な理念とし、開発途上国・先進国を問わない17のSDGsの中には、SDGs 9「産業と技術革新の基盤をつくろう」、SDGs 11「住み続けられるまちづくりを」といった、まちづくりに深く関わる国際目標

も含まれています。特に、SDGs11 の中では、水関連災 害などの災害による死者や被災者数、直接的経済損失を 削減すること、気候変動の緩和と適応、災害に対するレ ジリエンスを強化するための総合的政策及び計画の導 入・実施の推進がターゲットとして設定されており、災 害に強いまちづくりの必要性が世界的に高いことが確認 できます。その一方で、2021年に発表された気候変動に 関する政府間パネル(IPCC: Intergovernmental Panel on Climate Change) の第 6 次評価報告書においては、 今後も地球温暖化が進むことによって、大雨や洪水の強 度が増し、より頻繁になるとも報告されており、災害に 強いまちづくりは、より重要となっています。また、現 代社会は気候変動だけではなく、人口減少や社会インフ ラの老朽化、感染症の流行といった様々な課題に直面し ています。こうした課題の解決に取り組むためには、現 状や問題点を効率的に把握し、より良い判断や政策を考 えていく必要があります。今回の講演では、こうした課 題解決に向けて、データを活用した災害に強いまちづく り、特に道路や公共施設といった社会インフラのマネジ メントに関わる研究を紹介しました。具体的にはデータ 活用の場面として、a)問題点を見つける、b)判断を助ける、 c)代替案を考える、といった3つの場面を想定し、それぞ れに関する研究を紹介しました。

はじめに、a)データを使用して問題点を見つけるための 取り組みとして、道路舗装の劣化が進みやすい道路が集 中している区間を明らかにした研究を紹介しました。こ うした地理空間情報を使用した方法は、古くは 19 世紀の ロンドンにおけるコレラの大流行時に、John Snow が患 者数と水道ポンプの位置を地図上に表し、コレラの感染 経路を明らかにした取り組みにまで遡ることができます。 John Snow は、この地図を用いることによって、コレラ の感染経路が、当時、多くの人々に信じられていたよう な空気を通じた感染ではなく、水を通じて感染すること を示しました。最近では、問題が集中している地域を地 図上で見つけるための定量化や統計的検定を体系的に行 う方法が開発されています。私達の研究では、こうした 方法を用いることによって道路舗装の劣化が進みやすい 道路区間が集中しているホットスポットを明らかにしま した。さらに、地盤の強度や盛土・切土といった構造物 の条件によって、この結果が解釈可能であることもわか り、今後の道路舗装の維持管理を考える上で有用な示唆 を与えられたと期待しています。

b)判断を助けるための方法としては、予測やパターン認識を得意とする機械学習を、老朽化した公共施設のマネジメントに応用した研究を紹介しました。日本は、高度経済成長期に多くの社会インフラが建設されたため、近い将来、老朽化した構造物の維持管理、運用の継続または廃止の判断が必要になると考えられています。公共施

設の建物についても例外ではなく、建物の壁や柱のコン クリートの状態、その中の鉄筋腐食度といった健全度を 調査し、その建物が継続して安全に使用できるか、否か の判断を検討する必要があります。こうした判断は、一 級建築士など専門家による判断が必要となりますが、全 国の公共施設の数に比べて専門家の数は少ないため、建 物の健全度の調査結果があれば、その結果を基に修繕の 必要性を判断することができる判定フローを作成するこ とが望ましいと考えました。私達は、建物に関する健全 度の調査結果と専門家の判断を学習データとして、機械 学習の手法の一つである決定木を応用することによって、 データに基づく判定フローを作成することを考えました。 このとき、「実際には建物が危険であるにも関わらず判 定フローでは安全と判断されてしまう誤判別」と、「実 際には建物が安全であるにも変わらず判定フローでは危 険と判断されてしまう誤判別」という2つの誤判別の内、 前者の発生を避けた判定フローを作成する方法を開発し、 その効果を確認しました。

最後に、自然災害に対してレジリエントなまちづくり を考える上では、災害リスクの低減を目指した土地利用 計画が必要となります。しかし、土地利用計画が多くの 関係者(行政や地域住民など)に関わるものであり、さ らには災害リスクの低減以外にも日常生活の利便性と いった多くの評価軸や選択肢があるため、関係者の意見 を一つの計画としてまとめるには多くのコストが伴いま す。こうした意見をまとめる際に、私達は、土地利用計 画の具体的なイメージ、特に、複数の評価軸の間のト レードオフ構造を、関係者が共通認識として持つことが 重要であると考えました。私達の研究では、災害リスク、 日常の交通費用、インフラの維持管理費といった複数の 評価軸について、どの評価軸を重視するか、を設定する ことにより、その設定の下で望ましい土地利用計画を効 率的に求める方法を開発しました。この方法を実際の地 域のデータを使用して解析した結果、災害リスクを低減 させると、交通費用やインフラの維持管理費が増加する 関係性があり、それは、どのような土地利用となってい るか、を具体的に示すことができました。

今回の講演では、データを活用して、より良い意思決定を目指すための方法に関する研究を紹介しました。こうした方法は、利用できるデータや観測技術、計算技術・環境だけでなく、社会のニーズとともに今後も発展していくと考えられます。現在、気候変動に伴う洪水リスクの変化に適応した意思決定を支援する方法の開発にも取り組んでおり、今後も社会的課題の解決に貢献できるような学術的研究を行っていきたいと考えております。

## 「仙台防災枠組」実現への貢献:

### 私たちにできること

泉 貴子 (国際環境資源政策論教授)

「仙台防災枠組」は、2015 年 3 月に仙台市で開催された国連世界防災会議にて、参加国 187 か国によって採択された今後 15 年間の各国が実施するべく防災活動の指針です。4つの優先行動と 10 のグローバルターゲットが明記されています。4 つの優先行動とは、1) 災害リスクの理解、2) 災害リスク管理のための災害リスク・ガバナンスの強化、3) 強靭性のための災害リスク削減ための投資、4) 効果的な応急対応のための災害への備えの強化と、復旧・再建・復興におけるより良い復興です。

この仙台防災枠組が採択される前には、2005 年に神戸市で開催された国連世界防災会議にて採択された「兵庫行動枠組」がありました。「兵庫行動枠組」が採択されるまでの 10 年間の成果としては、政府・自治体・市民の防災に対する意識が向上し、積極的な参加が実現したとされています。しかしながら、この 10 年の間にも自然災害による被災者は数多く存在し、特に多くの子供・高齢者・女性などが被害に合う場合が多くみられました。自然災害による被害を大きくする要因として、貧困・不平等・気候変動・都市化などが考えられます。このような防災の枠組を実現するためには、様々なステークホルダーの参加が不可欠です。国連機関をはじめとする国際機関、政府、自治体、企業、学術、NGO/NPO、市民など全員参加の防災活動が求められています。

仙台防災枠組が採択された同年 2015 年に「持続可能な 開発目標 (SDGs) | を含む「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」も採択されました。貧困を撲滅し、持 続可能な世界を実現するために、17 のゴールと 169 の ターゲットからなる SDGs を掲げました。発展途上国の みならず、先進国自身が取り組む目標であり、取り組み の過程で地球上の誰一人として残さないことを誓ってい ます。SDGs の達成にも、多種・多様なセクターが連携・ 協力する「マルチステークホルダーパートナーシップ」 の促進が重要とされており、あらゆる知識や専門的知見、 技術や資金を多様な形で動員することが求められていま す。防災と SDGs も密接に関わっており、SDGs の達成 には防災力強化が不可欠です。例えば、「目標1:貧困 をなくそう」では、気候変動や災害への脆弱性を軽減す ること、「目標 11:住み続けられるまちづくりを」では、 災害に対する強靭さを目指し、仙台防災枠組にそって、 あらゆるレベルにおいて総合的災害リスク管理を策定し 実施すること、「目標 13:気候変動に具体的な対策を」 では、災害への強靭性・適応能力を強化することが、こ れら三つの SDGs 達成のためには重要な要因とされてい ます。

近年の新型コロナ感染症の影響で、SDGsの達成はより困難になりました。新型コロナに加え、気候変動・紛争などが達成に大きな影響を与えています。特に、新型コロナにより、貧困が進み、ウクライナでの戦争は難民危機、食料・燃料・肥料の高騰を招き、世界は食糧危機の脅威にも直面しています。世界の温室効果ガス排出量削減も進んでいません。今後、一層、温室効果ガスの削減や再生可能エネルギーの安定化、森林減少の抑制、革新的技術や社会構造の変化が急務です。さらに、すでに起こっている、また将来予測される気候変動およびその影響に対して、実際の被害や損害をやわらげ、回避するための対策も重要です。東日本大震災の復興にて積極的に取りいれられた津波防御のための「多重防御」や「津波避難の丘」などがこれに当たります。



図・写真出典: 防災環境都市 仙台ホームページ: https://sendai-resilience.jp/efforts/government/development/forest\_and\_hills.html

このようなインフラを中心とした防災対策以外にも、防災教育、ハザードマップ、防災訓練、事業継続計画の策定なども不可欠です。現在、東北地方には「3.11 伝承ロード」として震災の記憶や経験を風化させないための施設が数多く建てられています。このような施設から、震災を経験していない若い世代や他県の方々にも震災からの教訓を伝え、防災について考えていただく機会を東北から発信することも将来の災害リスクを減少することに貢献しています。



地図出典: 3.11 伝承ロード キッズページ https://www.thr.mlit.go.jp/shinsaidensho/kids-02.html

## 国際文化研究科主催行事の報告

#### キャリア講習会

#### 坂巻 康司(多文化共生論講座教授)

2023年11月19日、東北大学大学院国際文化研究科の 令和4年度キャリア講習会がオンラインにて開催されま した。



本研究科は、1993 年に独立大学院として創設されて以来、実に 30 年に亘って学生への教育を続け、その間、数多くの学生を修了生として世に送り出してきました(その数は 2018 年現在、880 名に上る修士号取得者、209 名に上る博士号取得者とのことです)。そのうちの多くは研究者としての道を順調に歩み、中にはその分野を代表するような優秀な研究者になった方も何人かいます。

しかし近年、とりわけ海外からの留学生が多く在籍するようになり、現在では卒業生の進路は実に多岐に亘り、研究職や教職以外にも多種多様な職業に就いている、というのが実情です。例えば、令和 3 年度に本研究科を修了した 14 名の学生が就いた職種は、教育・学生支援関連が 4 名、学術研究関連が 2 名いる以外に、製造業が 3 名、情報・通信業が 5 名、ということがデータで示されています。つまり、14 名のうち 8 名、約半分の卒業生が学術・教育以外の職業に就いている、ということが分かるわけです。研究科としては、このような様々な職に就く可能性がある学生たちのために、毎年、各分野で目覚ましく活躍されている修了生をお招きし、「キャリア講習会」という枠組みのもとに、その就業の実体を率直に語っていただく「場」を設けて来ました。

今年度、この講習会の講師としてお招きした呂春苹(ろしゅんへい)さんは、2013年3月に国際文化交流論専攻国際環境システム論講座博士課程前期2年の課程を修了後、仙台育英学園を経て、現在は山梨学院高等学校にて留学生支援事務局主任という立場で仕事をしている、とのことです。今回の講習会で、呂さんは自分自身が日本の職場で経験して来た様々な出来事について、実に懇切丁寧に説明し、日本において外国人が仕事をする際の難しさについて、非常に分かり易く解説してくれました。そのお話は、実際にそういう経験をした者でないと分からないような内容のものが多く、非常に興味深いものでした。

呂さんが講習会のために用意してくれたパワーポイントは非常に簡潔にまとめられており、誰の目から見ても大変理解し易いものだったと思います。このことは、呂さんが日頃から相手に対してどのように語りかけたら容易に理解してもらえるのかということを、真剣に考えているからなのだと想像されました。そうしたことからも、呂さんの日常生活での丁寧な仕事ぶりを確かに窺い知ることが出来ました。

オンラインで講習会に参加した学生は、当然ながら、 そのほとんどが留学生で、数は必ずしも多くはありませんでしたが、非常に真摯な態度で講習会に臨んでいたようです。その多くが、やはり呂さんと同じように日本での就職を希望しているように思われました。その為、(オンラインですから確かなことはもちろん分かりませんが)多くの皆さんが呂さんの話を一言も聞き漏らすまいと、真剣に耳を傾けているように感じられました。それは恐らく、自分自身が日本企業に就職した場合にどういような試練が待ち受けているのか、日本企業ではどういう態度を取ったら物事がスムーズに行くのか、というような考えや思いを彼らが持っているからなのだろうと感じました。

実際に、講演の中で呂さんから投げかけられた幾つか の言葉は、非常に貴重なものでした。それは、呂さんの 職場のみに当てはまるものではなく、大学、あるいはそ の他の職場にも当てはまる、普遍的な内容のものだった と言えます。とりわけ、「個人的感情に動かされて行動 するな」というアドヴァイスは誰にとっても身につまさ れるものでしたし、「仕事への熱意を持て」という点も、 基本的なことではあるものの、非常に重要な指摘だと感 じられました。講演後、質疑応答になりましたが、私は 呂さんに「中国に戻って仕事をしようという気にはなら ないのでしょうか。日本は仕事がしやすい所だと思いま すか」と尋ねたところ、非常に明るい調子で「仕事は日 本でのほうがやり易いです」と即答されたのが印象的で した。「すっかり日本人のようになってしまった、とい うことですね」と応じると、笑って頷いてくれました。 確かに言葉もすこぶる流暢な呂さんならば、普段、ほと んど日本人と同じように仕事をされているのだろうと感 じられました。しかし、このような高い水準に到達する までに、呂さんは私たちが想像も出来ないような懸命な 努力をされたのではないかと推察されました。

様々な経験談から成っていた今回の呂さんの講演は、 研究科に所属するすべての学生にとって、自分たちの将 来像を考える上で非常に有益で刺激的なものだったので はないかと思われます。その意味で、こうした講習会は 今後も続けて行く価値があると改めて思わされました。

## <u>2022年 ピアサポーター活動報告</u>

東北大学では、コロナ下の学生支援制度の1つとして「学生ピアサポーター制度」を実施しました。

これは、新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために、 学生が登校やアルバイトが制限される中でも安心して学生 生活を送れるよう、在学生がピアサポーターとしてオンラ インにより新入生とコミュニケーションを取ることで、新 入生の不安を解消し、ピアサポーターとなる在学生にも経 済的支援を行う制度です。

2022年度は、3名の在学生がピアサポーターとして活躍しました。

2022年度ピアサポーター活動報告

博士課程前期2年の課程2年次

シータクーン スティーラーさん 陸小曼 (リク ショウマン) さん 劉晨皓 (リュウ シンコウ) さん

この数年、コロナ禍でみんなの学生生活は大きく変化しました。大学での授業がオンラインで行われるようになったり、運動会や文化祭などの大切なイベントが中止になったり、内容が縮小されたりして、学生同士のコミュニケーションが取りづらいという課題が生じています。

このような状況で、我々の国際文化研究科は学生同士が交流を深めるためのイベントの一つとして学生懇親会を設けています。オンラインの制限があるにも関わらず、懇親会は異なるバックグラウンドを持つ学生同士が交流する機会であり、新しい友人を作ることもできますし、また、学生生活の中でも特別な思い出の一つとして残ります。同級生や友人たちと楽しい時間を過ごすことで、大学生活を充実させることができます。

ピアサポーターのメンバーとして、我々は懇親会の計画と実施に力を注ぎました。コロナ禍により対面で開催するのが難しいため、懇親会は 2 回ともオンラインとなっています。計画の段階では、我々は懇親会の対象者、開催時間、流れ、各自の役割などについて細かいところように、我々は様々な工夫をしました。まず、アイノで緊張を解きほぐして話しやすい雰囲気とした。なり上げるため、参加者にもの希望順で決まったゲームをやることにしました。最後に、参加者たちが抱えている悩みや関心を持っている話題について、先輩なりに意見を与えたり、情報を共有したりするセッションを設けていました。以上は懇親会の大体の計画でした。

開催前日にきちんとリハーサルを行ったため、第 2 回の懇親会はミスが何一つもなく無事に実施しました。「研究科の学生同士が勉強以外の話ができる・言語や文化の交流ができる『場』をつくりたい」という思いで、今回も前回と同じような形で、オンラインボードゲーム

会と交流会を開催しました。イベントの流れとしては、 アイスブレイク、ゲーム、交流会いう構成でした。アイ スプレイク活動には、参加者に事前に 2 枚の自己紹介の パワポを準備してもらい、当日に自己紹介をしてもらい ました。1枚目は普通の自己紹介ですが、印象に残った人 間関係を作るため、2枚目は参加者に自分の本当の特徴を 3つ、嘘の特徴を1つ入れてもらい、他の参加者に当てて もらう真偽ゲームをしました。このゲームで、普通聞き 流される自己紹介は面白くなって、みんなも興味津々で ゲームをしていて気付かないうちに他の方を覚えました。 その次、ボードゲームセッションには、「タブー」とい うボードゲームを導入しました。第 2 回では、英語コー ス(IGPLS)の学生も何人か参加してくれていましたの で、日本語と英語両方を使って進行してみました。英語 での説明や進行役は難しかったが、日英両言語も得意の 方の助けで順調にやりました。今回のゲームの内容は、 使用禁止の 4 つの関連語彙を使わずに、与えられたキー ワードを口頭で説明して、他の参加者に当ててもらうと いうゲームでした。最初簡単すぎると思った方は何人も いますが、やってみると意外に難しくて、勘違いが何度 も起こってみんな大笑いしていました。ボードゲームの 後、Q&A とフリートークセッション(話題を設けず、場 の流れに任せて自由に話をしてもらう)を行いました。

当日は、将来の進路や、趣味が同じ人同士のコミュニケーションとか(例:ホラー映画好きや、サッカー鑑賞好き)、美味しい店など、仙台・東北大での生活に関する情報を交換する機会となりました。時間のため途中で話を切りましたが、新しい友達になる方はこれからも仲良くしていくと思います。最後に、顔を合わせることができないですが、みんなは無敵な笑顔をカメラに出して、素晴らしいスクリーンショットを撮りました。

この度、参加者の方が色々の体験をできて、友達も作れたと思いました。それから、我々はピアサポーターの仕事で企画、コミュニケーションと問題解決など、多角の能力を鍛えることができました。何らかのイベントを自ら企画・開催するのが初めてなので、こんなに大成功させるとは思わなかったです。参加者の皆さんが楽しんでいる様子を見てすごい達成感を感じました。また、歌親会のおかげで、我々は他国出身の方々とコミュニケーションをとって違う文化に触れることもできました。異文化交流を通して、我々は多様な価値観を持つ留学生と文化交流を通したり、相互理解を深めたりしました。この期間に体験できたことは一生忘れがたい良い思い出になりそうです。ピアサポーターを担当して本当によかったと思いました。



懇親会のスクリーンショット

## 2022年 学生生活調査アンケート 集計結果報告

鄭 嫣婷(応用言語研究講座准教授)

新型コロナウイルス感染症の拡大により、約3年間にわたり、生活の様々な面で制限を受けてきました。今は新型コロナウイルス感染症の終息が見え、マスク着用も個人の選択に委ねられることになりました。しかし、長期にわたる厳しい学生生活のため、生活、研究、就職において、多くの学生が悩みや不安を抱えていることが予想されます。学生進路指導委員会は、2022年9月に、研究科内の学生が抱える悩みや不安、研究生活での問題点などを把握するためにアンケート調査を実施しました。調査結果を以下にまとめます。

#### 【調査期間】

2022 年 9 月 17 日から 9 月 30 日まででした。日本語 コースの在籍者 96 名のうち 55 名、英語コースの在籍者 32 名のうち 15 名が回答しました。

#### 【調査結果】

生活面においては、感染症の不安が少なくなったものの、長期にわたるコロナ禍によるアルバイト減少などによる経済的な不安が最も多くの学生にとって現実的な問題であることがわかりました。そのため、研究科では奨学金や RA、TA などを活用したサポートの提供に加え、工夫を重ねていくことを検討しています。

研究活動に関しては、自宅での研究活動や研究資料の アクセスの困難さ、学生同士のコミュニケーション不足 などが課題として浮上しています。しかし、昨年に比べ て対面の講義が増え、学生や先生とのコミュニケーショ ンの機会が増えたことから、不安を感じる程度は減少し ました。

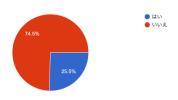
就職活動に関しては、情報収集の難しさや研究科レベルの支援の必要性などが課題として挙げられました。

研究科に対する要望として、以下が挙げられました。 学生寮の制度の見直し、書類提出が簡易に行えるシステムの導入、対面研究会の開催、母語話者でない学生に対する英語や日本語論文の執筆支援、就職活動支援、業界との交流の場の提供などです。

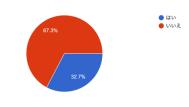
当研究科では、今後も生活面や心理面において、より 一層のサポートを充実させ、教育や研究活動に安心して 取り組むことができるよう、最大限の対策を引き続き推 進してまいります。

## 生活面での不安

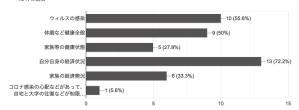
Q7. 昨年 (あるいは 前期) と比べて、 現在の生活状況は変わりましたか?



Q9 現在、生活面での問題や不安はありますか?

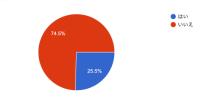


Q10. Q9で「はい」と答えた方にお尋ねします。どのよ…の問題や不安を感じていますか? (複数回答可) 18 株の同等

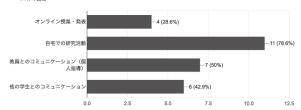


#### 授業・研究活動面での不安

Q13. 現在、授業・研究活動面での問題や不安はありますか?

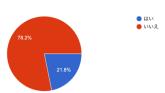


Q13で「はい」と答えた方にお尋ねします。どの...面で問題・不安を感じていますか?(複数回答可) 14年の回答



#### 就職活動での不安

Q17. 就職活動で問題や不安はありますか?



## 「アルムニひろば」同窓生のコラム

### Diego Dardon (ディエゴ ダードン)

(Graduated from the International Graduate Program in Language Sciences (IGPLS) in September, 2022)



I received both my Master's and Doctoral degrees in the International Graduate Program in Language Sciences at GSICS, Tohoku University. My research interest lies at the interdisciplinary field of language learning and human brain

science. Specifically, my research focuses on investigating cognitive individual differences and neural mechanisms during learning typologically diverse language structures using behavioral and fMRI techniques.

Thanks to the help and support from my advisors and friends in GSICS, I have had a wonderful experience in Japan as an international student and researcher during the past five years. Although the pandemic thwarted most of my time as a doctoral student, I still learned gained much knowledge in learning to do research and the tools to do good research. In particular, I felt my understanding of linguistics, statistical analysis, and fMRI data imaging exponentially due to the help of my supervisor, professors, and my lab mates. I was lucky for all their help and feedback in order to become a much better researcher as well as their encouragement to keep a positive attitude. In particular, my supervisor always supported pursuing me to continue interdisciplinary research of language and brain sciences reminding me that it takes time to grow as a researcher. Whenever I encountered difficulties, these encouraging words always helped me along the way. During my studies at GSICS, the Language Sciences program frequently invited world-renowned researchers from different fields to present online the latest cutting-edge research from their respective fields. These informative and insightful presentations not only broadened my perspective about disciplinary research but also helped me gain knew knowledge that I could apply to my own research. I am very grateful to my supervisor, professors, and lab mates for all their support and stimulating discussions. Currently, I am working as a postdoc at GSICS, and I look forward growing as a researcher, and I hope to enter my next career as a model representative of GSICS. I sincerely recommend this program for international studies to help broaden your perspectives and enhance your careers!

## 



2022年3月にアジア・アフリカ研究 講座博士前期課程を修了した薛暁蒙と 申します。2019年9月、私は研究生と して来日し、国際文化研究科に入学し ました。翌年、院生になりました。研 究科の先生方と研究室の皆様のおかげ で、充実した二年半を過ごしました。

2022年5月から中国の電機メーカーで、日本市場向けの海外営業として働いています。

博士前期課程に在籍した時、私は魯迅の『傷逝』と夏 目漱石の『それから』に表れた女性観・恋愛観を比較研 究しました。私は両作品に表れた女性観・恋愛観を比較 考察し、これにより両者の類似点と相違点を明瞭化し、 両者の女性観・恋愛観を、形成過程をも含めて多角的に 分析しました。

私が希求するのは文学研究のみならず、比較手法や、 異文化理解のための分野横断的な視点を学び、より独創 的な研究を推進し、国際的な視野がある人になりたいです。

また、専門授業では、異文化理解、異文化コミュニケーション、外国語、地域研究などを勉強し、異文化に対する理解が深まり、言語力も高まりました。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、授業とゼミは オンラインになりました。しかし、先生方から熱心なご 指導を受け、ゼミの皆様から多角的なコメントをもらう ことができて、非常に有意義な二年半を過ごしました。 心より感謝いたします。

修了後、私は帰国し、中国の電機メーカーに入社しました。先進技術を通じて、持続可能な社会の実現に貢献し、より多くの人々を幸せにしたいと考えているからです。そして、世界を舞台に働きたいと思い、海外営業職に就きました。今は日本市場に向けて、白物家電を販売し、人々の暮らしの快適空間づくりに貢献しています。

海外営業の仕事では、言語力はもちろん、担当する国の文化と習慣への理解も必要です。留学生活で身についた異文化理解のための国際的な視野と言語力を活かすことができて、非常によかったです。また、研究生活では、多様な考え方に柔軟に対応すること、失敗を恐れず積極的にチャレンジすることを学びました。海外営業として新米であるが、前向きに挑戦し続けています。コロナ対策がだいぶ緩和され、海外出張ができるようになりました。初めての海外出張を楽しみにしています。

仕事で疲れた時、よく大学院での生活を思い出しました。先生方と皆様の言葉と笑顔、研究室の皆様と一緒に食べた芋煮、川内キャンパスに積もった白雪など、私にとって非常に励みになります。先生方と皆様、心から感謝を申し上げます。

## 事務局より

### ①メールアドレスの届出についてのお願い

国際文化研究科は 2023 年度創設 30 周年を迎えます。 この期に合わせて、同窓生・修了生の皆様の名簿を 更新・整備したいと考えています。社会でご活躍され ている皆様との繋がりを維持・強化し、研究科から皆様 への情報発信を充実したものにしたいと考えております。

つきましては、同窓会ホームページに掲載している届出用フォームより、皆様の連絡先(メールアドレス)等の情報をご提供いただきますようお願い申し上げます。いただきました情報は、本学および本研究科同窓会関連の連絡や修了生向けの連絡に使用し、その他の用途に用いず、適正に管理することを申し添えます。

皆様のご協力を何卒お願い申し上げます

# ②会費納入・「国際文化研究科教育研究支援基金」 ご協力のお願い

○会則 12 条に基づき会員の皆様に会費等の納入を お願いいたします。

第12条 学生会員は、入学時及び進学時に入会金及び会費を次のとおり納入するものとする。

- 2 入会金は2, 000円とし、初めて学生会員となったとき 1回に限り納入する。
- 3 会費は、次のとおりとする。
  - (1) 国際文化研究科前期課程の学生 2,000円
  - (2) 国際文化研究科後期課程の学生 3,000円

会費は郵便局からお振り込みください。

郵便振替口座名称:国際文化研究科同窓会郵便振替口座番号:02220-5-66621

○上記以外の方(修了生、在学生、現教職員・元 教職員などの皆様)には、**国際文化研究科 教育 研究支援基金**へのご支援をいただければ幸いです。

#### <国際文化研究科 教育研究支援基金>

https://www.kikin.tohoku.ac.jp/project/support\_the\_depertment/GSICS



郵便振替・銀行振込のほか、 クレジットカード決済 コンビニ決済も可能です。

# ③国際文化研究科 30 周年記念行事への参画について

国際文化研究科は、令和5 (2023) 年4月に創立30周年を迎えます。研究科は、これまでの歩みを振り返り、力強く次の10年に歩み出すために、記念事業を開催することを決め、その準備と実施を検討する委員会を立ち上げました。委員会では、30周年の記念事業を、同窓生と現役生の繋がりを強め、同窓会組織をより堅固にするものと位置付けています。

今後、同窓会ウェブサイトやメールなどを通じて同窓 生の皆様に関連する情報を発信していきますので、ご協 力をよろしくお願い申し上げます。

#### ④西棟 改修工事について

研究科の念願であった国際文化研究科西棟の改修が国に認められました。令和5 (2023) 年夏頃から改修工事が始まり、翌令和6 (2024) 年度の開始時期にはリニューアルした西棟がお披露目される予定です。

上述の30周年記念事業では改修後の西棟を同窓生の皆様にも紹介したいと考えています。そのため記念事業を令和6(2024)年度中に開催することを計画しています。

### 国際文化研究科同窓会事務局

int-dosokai@grp.tohoku.ac.jp

#### 国際文化研究科同窓会ホームページ

https://www.intcul.tohoku.ac.jp/alumni/